

第2歌 テレマコス、集会を催し、旅立つ

翌朝、[テレマコス](#)は[アカイア人](#)の集会を催し、求婚者の悪行を訴えた。[アンティノオス](#)や[エウリュマコス](#)を中心とする求婚者たちは、[ペネロペ](#)が求婚に応じないのが悪いと主張した。結局、求婚者の圧力の前に、集会の効果はなく散会となった。テレマコスはその晩、後見人[メントル](#)と共に船で旅に出発した。

内容

テレマコス、集会を開く 朝になり[テレマコス](#)はすぐに触れ役に命じて、[アカイア](#)人たちに集会所へ集まるよう触れさせた。集会所に一同が集まると、テレマコスは犬二頭を従えて広場に向かった。テレマコスが父親の座に座ると、長老たちも席を譲って脇へ退いた。

老雄アイギュプティオス、最初に発言する 最初に口を切ったのは老雄[アイギュプティオス](#)だった。老人は一同にいった。

「[イタケ](#)に住む方々よ、[オデュッセウス](#)が船で出征されて以来、この国で集会が開かれたことはなかった。今どなたがどのような事情でこの集会を催されたのだろうか。願わくば[ゼウス](#)がその方の念願を叶えてあげて下さるように」

テレマコス、窮状を皆に訴える [テレマコス](#)は場の中央に進み出て言った。

「老人よ、皆を集めたのはこの私だ。実は私の身の上に二重のつらいことが起こっている。一つは私が優れた父を失ったこと、もう一つは母への求婚者がわれらの屋敷に押し寄せ、連日飲み食いをしては私の財産を食い潰していくことだ。私は若輩で家を守るだけの力がなく、今や我が家は破滅に瀕している。そなたらはこの無法に憤りを覚えないか。求婚者の方々よ、どうか我が家から手を引いて、私をそっとしてほしい。」

怒りに燃えてこういふと、涙を流しつつ、杖を大地に投げ捨てた。



(画像/[ペネロペと求婚者](#))

アンティノオス、テレマコスに反論する 一座は彼に同情し、静まり返っていたが、[アンティノオス](#)が彼に答えていった。

「[テレマコス](#)よ、よいか、こうなったのはそなたの母の罪なのだ。そなたの母は皆に気を持たせる約束をしておいて、はぐらかし続けている。そなたの母はこんな悪巧みもした。屋敷の中で機を織り始め、我らに向かって、『求婚者の方々、結婚はこの着物を織り上げるまで待つて欲しい。これは舅の[ラエルテス](#)が亡くなった時に備えた甲いの衣装なのです』と、こういう話だったので、我らも得心し待つことにした。だがそなたの母は、昼は布を織り、夜はそれをほどいていたのだ。そうして四年目にそれが明らかになるまで、三年間も我らを欺いていた。テレマコスよ、我らの返事はこうだ。そなたは母を実家へ帰し、誰でも望む男に嫁ぐようすすめるのだ。このままではそなた

の家の財産はいつまでも食い潰されてゆくだろう」

テレマコス、アンティノオスに答える テレマコスはいった。

「アンティノオスよ、母をむりやり追い出すことなど、とてもできることではない。祖父イカリオスに多額の賠償もせねばなるまい。されば、そのようなことを母に告げる気はまったくない。ともあれ、そなたらは我が屋敷から退散し、自前で宴会を催すことを考えてもらおう。それでも他人の財産を食い潰す方が結構だと思ふなら勝手にするがよい。その時にはゼウスは私の復讐を成就させて下さり、そなたらはこの屋敷で死んでもらうことになるだろう」

老雄ハリテルセス、求婚者に警告する この時、ゼウスは遥かな山頂から二羽のワシを飛ばした。ワシは広場の上空まで来ると、下降しながら、互いに頬や首を掻きむしり、右方へ飛び去った。人々は鳥の動きに驚き、動揺した。そこで老雄ハリセルテスが口を開いた。彼は予兆を知る術に長けていた。

「求婚者たちよ、あなたがたの身に災厄が迫っている。オデュッセウスはいつまでも故郷から離れてはおられまいからだ。どこか近くにあつて、求婚者全員を誅殺せんと謀っているのだろう。さればこそ、求婚者たちは自制せねばならぬ。私は二十年前、オデュッセウスは放浪の末に帰国するだろうと予言したが、それが今ことごとく実現しようとしているのだ。」

エウリュマコス、ハリテルセスに反論する エウリュマコスがそれに答えた。

「爺さんよ、予言なら家で息子たちにでもしてやれ。オデュッセウスは異郷で果てたのだ。よいか、予言などと御託をならべて、若者を粗暴な行為に駆り立てるようなことをすれば、おぬしには代償を払ってもらうことになる。テレマコスに忠告しよう。彼は母を実家に帰さねばならぬ。そうすれば実家では、ふさわしい持参金も用意するであろう。それがなされるまでは、テレマコスの財産は散々に食い荒らされるだけだろう。」

テレマコス、旅立ちを告げる テレマコスは答えていった。

「求婚者たちよ、そのことについて、もはやそなたらに頼みもせねば議論もすまい。それはさておき、船を一艘と、水夫二十人を貰いたい。私はこれから父の消息を求めて、スパルタとピュロスへ行こうと思う。そこで父が生きて帰ると聞けば、一年は辛抱するつもりだ。しかし父がすでに死んだと聞けば、国へ帰り、葬儀を行い、それから母を嫁がせよう。」

メントル、住民たちを煽る そこで、オデュッセウスの僚友のメントルが立ち上がっていった。

「イタケの方々よ、聞いてくれ。求婚者たちの思い上がった振る舞いを私は特に怒ってはおらぬ。彼らはそれを自分らの命を賭けてやっているのだから。私が許せないのは、むしろそなたら、他の領民たちなのだ。多数を誇るそなたらが、求婚者たちに一言のとがめだてもせず、制止することもできぬとは、何という醜態だろう。」

レオクリトス、集会を閉じる レオクリトスがそれに答えて、

「無礼だぞ、メントル。よくも領民を煽り、そのような暴言を吐いたな。我らと戦うのは容易なことではないぞ。かりにオデュッセウスが帰ってきて、求婚者たちを追い出そうとしても、多数を相手に戦えば、ぶざまな最期をとげるだろう。さあ、領民たちは散会してそれぞれの仕事に戻れ。この男の旅の支度は、親しい間柄のメントルとハリテルセスがするであろう。しかし、この男がいつている旅など果たせるわけがない」

こういふと、集会を閉じてしまった。民衆はそれぞれ家路につき、求婚者たちはオデュッセウスの屋敷へ向かった。

メントル、テレマコスをはげます テレマコスはひとり波打際へ行き、アテナに祈っていった。

「父の消息を求めて、海を渡って行けと仰せられた神よ、お聴きください。求婚者どもはなにかにつけ私の邪魔をするのです。」

そこへメントルに変身したアテナが歩み寄り、こういった。

「テレマコスよ、そなたが父のごとき凜とした気概を持っておれば、今後見苦しい振舞いをしたり、愚かな過ちは犯すまい。今は求婚者どもの企みなど忘れるがよい。そなたには私がついていないか。そなたは家へ帰り、食糧や酒を用意しなさい。私はこれから町へ行き、水夫や船を手配しよう。」

それを聞くと、テレマコスはその場でぐずぐずせず、心は重く沈みつつも屋敷へ向かった。

求婚者たち、テレマコスを嘲笑する 屋敷では求婚者たちが、肉をあぶっている最中だった。アン

[ティノオス](#)は笑いながら[テレマコス](#)にいった。

「[テレマコス](#)よ、そなたは大口をたたく男だが、もう毒づくことはやめて、飲み食いしてくれ。船も水夫も、[アカイア人](#)たちが調達してくれるであろう。」

[テレマコス](#)は答えた。

「[アンティノオス](#)よ、そなたのような乱暴者と食事をして楽しいわけがない。求婚者たちよ、そなたらは私の家の財産を散々食い散らかしておいて、まだ足らぬというのか。私も以前は幼かったが、成人した今は、なんとしてでもそなたらに死神を差し向けてやるつもりだ。」

求婚者たちは、[テレマコス](#)を嘲笑し、口々にいった。

「[テレマコス](#)め、確かに我らの殺害を目論んでいるぞ。[ピュロス](#)か[スパルタ](#)から援軍を連れてくるつもりかも知れない。あるいは[エピュレ](#)に行き、毒草を持ち帰って混酒器に投じ、我らを皆殺しにするつもりかも知れぬ。」

また、別の求婚者たちはいった。

「彼も[オデュッセウス](#)同様漂流した挙句、死ぬかも知れん。そうすれば、我らの苦勞がまたふえることになる。財産を我らの間で分けねばならぬし、屋敷は彼の母と結婚する男に渡さねばならぬしな。」

[テレマコス](#)、[乳母に食糧を準備させる](#) [テレマコス](#)は、そういう求婚者たちを後に、納戸へ降りていった。ここには財産や食糧や酒が保管してあったが、[テレマコス](#)は女中頭の[エウリュクレイア](#)を呼び出していった。

「婆やよ、酒と食糧を準備してくれ。そしてそのことは内緒にしておいてほしい。日が暮れて、母が二階に上がった頃、私が取りに来る。実は父上の消息を求めて、[スパルタ](#)と[ピュロス](#)へ行くつもりなのだ。」

心優しい乳母は悲しみの声をあげつついった。

「坊ちゃん、なぜそんなことをなさいますか。[オデュッセウス](#)の殿様はもう異国でお亡くなりになってますよ。あの求婚者どもは、あなたが旅に出ればすぐに、悪巧みをしてあなたをだまし討ちにするでしょう。どうか、家を守ってここに留まって下さい。」

そういう乳母に、[テレマコス](#)は答えていった。

「案ずるな、婆やよ、これは神の思し召しなのだ。このことは母上には申し上げぬと誓ってくれ、せめて今日から十二日ほどはな。母上に心配をかけたくないのでな。」

老女は決して洩らさぬと誓うと、酒と食糧を準備した。[テレマコス](#)は広間へ行き、求婚者の仲間に加わった。

[テレマコス](#)、[船で旅に出発する](#) この時、女神[アテナ](#)は[テレマコス](#)に変身して町中をまわり、行き会う者に声をかけ、日が暮れたら船に集合せよと命じた。さらにプロニオスの子[ノエモン](#)に船の手配を頼んだ。そして女神は[オデュッセウス](#)の屋敷に向かい、求婚者たちに眠りをふりかけ、彼らを家へ帰らせた。女神は[メントル](#)に変身して[テレマコス](#)を呼び出し、

「[テレマコス](#)よ、船の用意はすでに出来ている。さあ、出かけようか。」

と、海辺まで[テレマコス](#)を案内した。[テレマコス](#)は水夫たちに命じて屋敷から食糧を運ばせると、女神とともに船に乗り込んだ。水夫たちは船を出し、帆を張ると、神々に神酒を献じた。船は夜を徹して航路を進んでいった。

関連

人名

テレマコス	アカイア 人の集会を開催し求婚者を弾劾する
アンティノオス	求婚者のリーダー格
エウリュマコス	求婚者のリーダー格
メントル	オデュッセウス の旧友。集会で テレマコス を擁護。後半は アテナ が扮する
エウリュクレイア	テレマコス の乳母。女中頭
アイギュプティオス	集会の一人。集会で最初に口を切る
ペイセノル	集会の触れ役

ハリテルセス	集会の一人。 ゼウス の驚を見て オデュッセウス の帰郷を预言する
レオクリトス	求婚者。集会を強引に解散させる
ノエモン	テレマコス のため船の手配をする
ゼウス	集会へ驚を飛ばし、予兆を与える
アテナ	メントル に扮して テレマコス を助ける

地名

イタカ	オデュッセウス の故郷
ピュロス	ネストル王の町
スパルタ	メネラオス王の町

[前へ](#) ... [オデュッセイア](#) ... [次へ](#)